

耐震補強

1 2 . 完全外側直付け工法について

完全外側直付け工法を採用する場合、「外側耐震改修マニュアル」P7, P15 に記述されている補強目標値の余裕率 を考慮することを原則としているが、性能余裕係数 $= 1.0 \sim 1.2$ となっているため、 は診断者判断とする。($= 1.0$ を採用してもよい)

柱の強度、靱性指標の計算等に用いる柱軸力は、柱支配面積当たりの鉛直荷重時の軸力とすることが望ましい。(長期柱軸力採用) また、二次診断の場合には基礎回転は考慮しない。

接合部耐力余裕度を確保するため、鉄骨ブレースの上限強度に対する設計用応力の割増係数 $1.2 \sim 1.5$ を採用することが望ましい。(「外側耐震改修マニュアル」P60 参照)

補強要素は原則としてバランスよく配置し、基礎部分まで連続とする。

偏芯率・剛性率の再検討は、内付け工法と同じく等価剛性 R C 壁置換法で行ってもよい。

既存建築物のコア圧縮強度の平均値は、 18 N/m^2 以上とする。

1 3 . 既存梁側面増打による外部内付け工法について

梁側面増打による内付け鉄骨ブレース補強の場合、梁増打ち部は主筋・あばら筋・あと施工アンカー・スタッドおよびスパイラル筋等を有するため、壁増打ち以上に施工性が悪く、またジャンカ等によるコンクリート打設不良の可能性も高い。従って、梁増打幅は、補強工事における施工性と耐震性能を考慮し、原則として 250 mm 以上の適切な増打幅とすること。